

「ふるさとさぬきの歴史と民俗」を開催しました

平成22年11月5日から19日までの期間、3回にわたって地域史研究家の藤井洋一さんを講師にお迎えし、講座を開催しました。

ここ50年、「世間」は驚くばかりのスピードで大きく変化してきました。一方で、地域には昔からのすばらしい庶民の知恵が息づいています。そんなふるさとに残る豊かで暖かな知恵について考える講座となりました。



1回目は「地域に学ぶということ」というテーマで、各地に残る昔からの習俗を中心に講座がありました。山・川と暮らしとの関係、人びとの絆、地域での連帯と慰め、生死の場における儀礼など、広範囲に渡り、急速に失われつつある暮らしの習慣について、あらためて考える機会となりました。また、郷・庄の名、石高や寺院・海道などが克明に描かれた貴重な『寛永十年讃岐国絵図』が紹介され、現在の町名や地名と照らし合わせて、その変化を学び取ることができました。

2回目は「身近なところで」と題し、地域や旅、信仰の背景についてお話がありました。四国遍路の結願の地・高野山にある高野山金剛三昧院と讃岐とのつながりについて詳しい説明があり、その歴史的関係に関心が寄せられました。



3回目は「この世とあの世」というテーマで、庶民信仰の幅の変化について語られました。お遍路さんが奉納するお札に書かれる願意が、手書きから印刷になったのはもちろん、昔と今とでは主意文が異なっており、このことから、地縁・血縁で結ばれている世界から繋がりのない社会へ変遷しているのが感じられるということでした。

「民俗というのは、文字を媒介しないで人びとのしきたりや習慣を見つめるもの」と藤井さんがおっしゃるように、目にするだけで遠い記憶が蘇ったり、懐かしい気持ちになったりする習慣が、少ないながらもまだ私たちの暮らしの中に残っています。

受講生の皆さんにも、ふるさとの貴重な習慣について、あらためて思いを寄せる機会になったことと思います。